

『伊勢物語 芥川』に関連する複数の古典作品を読み比べることを通して、「歌物語」・「絵巻物」・「説話集」では表現の仕方に相違があることを知り、歌物語の特徴や面白さを感じよう。

1 目標、評価規準

・『伊勢物語 芥川』と『伊勢物語絵巻』、『伊勢物語 芥川』と『今昔物語集 卷二十七第七話 在原業平中将女被噉鬼語』を、本文と異なる描写に注目しながら読み比べることができる。

2 活動内容

（1）下段に掲げたのは『伊勢物語絵巻』の絵である。この絵は後代の解釈に基づいて描かれたものであるが、本文と比較して異なる点を、分かりやすく説明せよ。

※一続きの画面の中に話の進行に沿って幾つもの場面を描く手法が採られており、場面は右から左に展開している。

①男が女を背負って川のほとりにいるが、本文にはそのような描写がない。 （むしろ、本文では後に弓や胡籥を背負っているので不自然である）
②川には小さな橋があり、今まさに渡ろうとしているように見えるが、 本文に橋の描写はない。
③蔵と思われる母屋の戸口いる男の傍に女の姿があるが、 本文で女は蔵の奥に押し入れられているはずなので、傍にはいないはず。
④鬼が「赤鬼」として表現されているが、本文では色の描写はない。
⑤鬼が女の右腕に食らいつき、鮮血が流れているが、本文では鬼が一口で食っている ので、鮮血の描写はない。
⑥女が鬼に食われる現場を見た男が弓と胡籥を放り出して仰天しているが、 本文で男は鬼を目撃していないし、女が食われる現場に居合わせていない。
⑦女が「あなや」と発言している描写がない。
⑧そもそも建物が立派で「あばらなる蔵」には見えない。
⑨和歌に関する描写が全くない。
⑩絵巻物には暗さに関する描写が少ない。（絵巻物としての表現の限界）
⑪本文であった露の描写がない。
⑫音声言語としての会話等が表現されていない。
等々



(2) 次に掲げるのは『今昔物語集 卷二十七第七話 在原業平中将女被噉鬼語』である。後の活動に取り組もう。

《本文》

今は昔、右近うこんの中将ちゅうじやう在原はらの業平なりひらと云ふ人有りけり。極いみじき世よの好色こうしきにて、世にある女をむなの形美うろはしと聞くをば、宮仕人みやづかへびとをも人の娘をも見残す無く、かず員みを尽くして見むと思ひけるに、或る人の娘の形・有様ありさま世に知らず微妙めうでたしと聞きけるを、心を尽くして極く仮借けさうしけれども、「止む事なからむ智取むことりをせむ」と云ひて、祖共おやどもの微妙めうでたく傳かきければ、業平なりひらの中将力ちゅうぢりき無くして有りける程に、何にしてか構かへけむ、彼の女を密かに盗み出だしてけり。其れに、忽たちまちに将あて隠すべき所の無かりければ、思ひ縋あづかひて、北山科きたやまなの辺へどに旧ふるき山庄さんしやうの荒れて人も住まぬが有りけるに、其の家の内に大きなるあぜ倉くら有りけり、片戸かたどは倒れてなむ有りける。住みける屋やは板敷いの板も無くて、立ち寄るべき様やうも無かりければ、此この倉の内に畳一枚を具して、此の女を具して将あて行きて臥せたりける程に、俄にはかに雷電らいでん霹靂へきれきして惶のろりければ、中将ちゅうぢ太刀たちを抜き、女をば後の方に押し遣りて、起き居てひらめかしける程に、雷いかづちも漸おそく鳴り止みにければ、夜も嗟あけぬ。

而しかる間あいだ、女、音もせざりければ、中将ちゅうぢ恠あむで見返りて見るに、女の頭かしらの限りと、着たりける衣ころもどもとばかり残りたり。中将あさま奇異おそろしく怖おそしくて、着る物を取り敢あへず逃げて去りにけり。其れより後のちなむ、此の倉は人取りする倉とは知りける。然しかれば、雷電らいでん霹靂へきれきには非ずして、倉に住みける鬼のしけるにや有りけむ。

然しかれば案内あんない知らざらむ所には、努々ゆめゆめ立ち寄るまじきなり。況いはむや宿やどりせむ事は、思ひ懸かくべからずとなむ語り伝へたとや。

《解釈》

今となつては昔のことだが、右近中将在原業平という人がいた。甚だしい天下の色好みで、世間で女の容貌が美しいと聞くと、宮仕えの人でも人の娘でも一人残らず、ことごとく契りを交わそうと思つたところ、ある人の娘の容貌や振舞いがこの世にまたとないほど素晴らしいと聞いたので、真心を込めて甚だしく恋い慕うけれども、(その娘の親は)「(娘には)高貴な婿を取るつもりだ」と言つて、親たちが素晴らしく大切に養ひ育てたので、業平中将は手を出せないでいたが、どのような企みをしたのだろうか、その女をひそかに盗み出してしまった。ところが、(その娘を)実際に引き連れて隠すべき場所がなかったため、あれこれと心配して、(結局は)北山科あたりに古い山荘で荒れ果てて人も住まない山荘があったが、その山荘内に大きな校倉があった、(その山荘は)片戸が倒れていたそうだ。(人の)住んでいた家屋は板敷の板もなくて、入れそうな様子もないので、(業平中将は)この倉の中に畳一枚を備え、この女を引き連れて行つて寝ていた頃に、突然急な雷鳴がして轟いたので、中将は太刀を抜いて、女を後ろに押し遣つて、立ち上がつて(太刀を)ひらめかしているうちに、雷もしだいに鳴りやんだところ、夜も明けた。

そうする間に、女の声がしないので、中将は不思議に思い振り返つて見ると、女の頭と来ていた着物だけが残つていた。中将は驚き呆れるほど怖ろしくて、(自分の)着物も取ることなく(その場から)逃げ去つてしまった。それより後になつて、この倉は人を取る倉だと分かつた。すると、急な雷鳴ではなくて、倉に住んでいた鬼の仕業であつたのだろうか。

だから事情の知らないような所には、決して立ち寄つてはいけないものである。ましてや泊まるようなことは、思つてもしてはならないことだ、とこう語り伝えているということだ。

《資料》

次の資料は「歌物語と『伊勢物語』」及び「説話集と『今昔物語集』」についてまとめた内容である。

①歌物語と『伊勢物語』

- ・歌物語は和歌を中心とする短編物語である。和歌が詠まれる背景となつた事情を中心とした物語が展開される。
- ・『伊勢物語』が成立した年代は正確には判明していないが、原型が書かれたのは、九世紀終わり頃とされており、物語の内容や構成が現在の形になったのは、一〇世紀の半ば頃と推定されている。
- ・『伊勢物語』では、在原業平と思われる「男」の一代記のように構成されており、一二五段から成る。簡潔で雅趣がしゆに富み、情緒性や叙情性のある文章が特徴的である。それは今回の「芥川」でも当てはまっている。

②説話集と『今昔物語集』

- ・中古末期に新時代の文学として芽生えた説話文学には、総じて教訓的色彩の濃い内容が表現されている。
- ・『今昔物語集』が成立した年代も正確には判明していない。一二〇年以後、間もない頃に成立したとする説が妥当であると言われている。
- ・『今昔物語集』は、現存する日本最大の説話集であり、総数一〇〇〇余にのぼる説話が収録されている。当時の人々の様子を活写した話が多く、今回の「巻二十七第七話 在原業平中将女被噉鬼語」では、具体性と怪異性が強調されている。

活動：『資料』の赤字の指摘が正しいことを証明するためには、『伊勢物語 芥川』と『今昔物語集 卷二十七第七話 在原業平中将女』の両者を比較して、それぞれの文章のどのような点に注目すればよいか説明せよ。（8行以上記述すること）

前者の「簡潔で」の点については、前者は後者に比して、一文一文が短文で構成されている点から言える。また、「雅趣に富み、情緒性や叙情性のある文章が特徴的である」の点については、前者は後者と異なり、歌物語であるが故に和歌が収録されており、和歌自体に風流さがあるという点から指摘できる。また、男女が駆け落ちして逃避行する様子や、男と女の会話の様子を入れてすることで恋愛色を強めていると感じられるため、女が男の前から姿を消した時により叙情性が感じられるように工夫されていると言える。 後者の「教訓的色彩の濃い内容」については、後者の本文の最後に「然れば、案内知らざらむ所には、努々立ち寄るまじきなり。」というように、物語を総括する教訓的内容が収録されている点から証明できる。「当時の人々の様子を活写した話が多く」という点については、後者では「在原業平」という人物がどのような人物であるかの詳細（極き世の好色にてゝ仮借しけれども）等）が語られることや、女の様子が語られる（『止む事なからむく傳きければ』等）ことなどから、人々の生き生きとした様子が分かる。次に「具体性」については、先ほどから指摘している在原業平の人物像が具体的に描写されたり、鬼のいる場所が前者の文章では「あばらなる蔵」としか表現されていないのに対して、後者の文章では、「北山科の辺りに…」と具体的に描写されていたりすることから正しいと言える。最後に、「怪異性」については、後者で、在原業平が太刀を抜いてひらめかしているうちに雷鳴が鳴り止んだ描写や、女のいなくなった後に、女の頭と着物だけが残されている描写からも、前者と比較して「怪異性」が増していると判断することができると考える。									

3 評価（2）の活動のみ）

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	誤字・脱字・文の乱れ等がない。	「歌物語」及び「説話集」の赤字の指摘の中から、それぞれ複数箇所について根拠を明確にして自分の考えを述べている。また、その考えに妥当性があり、特に論理的である。	『伊勢物語』と『今昔物語集』における表現の違いについて、自らの意見論述を推敲しながら、8行以上で書いており、内容に具体性があるもの。
B	誤字・脱字・文の乱れ等がほとんどない。（不備が2か所以内）	「歌物語」及び「説話集」の赤字の指摘の中から、それぞれ複数箇所について根拠を明確にして自分の考えを述べている。また、その考えに妥当性があり、論理的である。	『伊勢物語』と『今昔物語集』における表現の違いについて考えた上で、自らの意見を書いてはいるものの、8行未満のもの。または、内容に具体性がないもの。
C	誤字・脱字・文の乱れ等が相当数ある。（不備が3か所以上）	「歌物語」及び「説話集」の赤字の指摘の中から、それぞれ一つについて自分の考えを述べている。またはそれぞれ複数箇所に触れているが根拠の乏しい考えになっている。	『伊勢物語』と『今昔物語集』における表現の違いについて考えた上で、自らの意見を書いてはいるものの、8行未満のもの。または、内容に具体性がないもの。